

乾 仁志 『初会金剛頂経』の仏典としての位置

レジュメ：

密教が歴史上に登場する年代については、必ずしも見解が統一されているわけではないが、一説によれば 5、6 世紀ころとされる。これは密教独自の修行形態（三密行あるいは三密瑜伽行ともいう）における真言・印契・曼荼羅という基本要素が出揃う時期を基準としたものである。そして 7 世紀には『大日経』や『金剛頂経』という組織的な密教経典が成立する。

『大日経』と『金剛頂経』は、わが国の真言宗では「両部の大経」と呼ばれ、常に並び称されてきた。しかし両経は同じインド中期密教に分類される経典であっても、成立時期が異なり、内容的にも明らかに発展段階を異にする。インド・チベット密教のタントラ分類法では、『大日経』を行タントラに、また『金剛頂経』を瑜伽タントラに配分するのも、両経の内容から見た発展段階の違いに基づいている。

それはさておき、『大日経』の成立によって、密教が確実に大乘仏教の一翼を担う段階に達したことは確かである。このことは『大日経』の中に密教独自の修行方法に対する主張がうかがえることから首肯できる。たとえば『大日経』には「真言門より菩薩の行を行ずる菩薩たち」というフレーズがたびたび現れる。この場合の「真言門」は、真言を誦することによって速やかに悟りにいたる密教の修行道を意味する語である。もちろん単に口密としての真言のみならず、身密としての印契や、意密としての仏・菩薩等の曼荼羅の観想も伴う。これによって暗に対比されているのは、六波羅蜜を行じて福德と智慧を積み重ね、それによって悟りにいたる従来の大乗仏教の修行道（波羅蜜門）である。

これに対して、『金剛頂経』系の密教経典の中では、密教を意味する語として「金剛乗」が用いられた。「乗」は大乘や小乗というのと同じく、悟りに導く教えを乗り物に喩えたものである。しかし金剛乗という語は、小乗・大乘に対して第三の立場を表明したのではなく、大乘の中での最高の教えという意味で使用されている。「金剛」というのは、金剛石(ダイヤモンド)または金剛杵を意味する語で、仏教の伝統の中で重視されてきた言葉の一つである。たとえば釈尊が最終的に煩惱を断ち切って悟りを開いた禅定を金剛喻定と呼ぶように、金剛は堅固さや鋭さを象徴する言葉として用いられてきた。またそのような性質があることから、大乘仏教では煩惱を断つ空性の智慧、如来の悟りの智慧にも喩えられた。この金剛乗という語がはじめて使用されたのが、『金剛頂経』系の中心的な密教経典であった『真実撰経』である。

ここでは『真実撰経』における仏典としての意義を、とくに金剛乗という用語との関係を中心に考察したところを報告したい。

キーワード：

金剛乗、善説、如来の出現